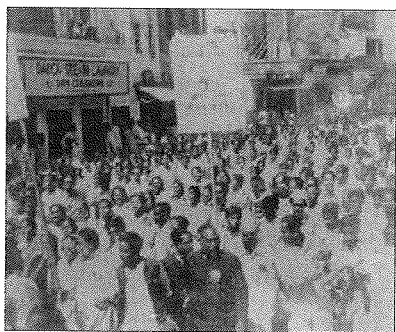


とする行為に対しては、はっきりNOと言わなければ、自国民を守ることはできない。日本はこれまで十分に謝罪し、賠償ならびにODAや技術協力というかたちで戦争責任を果たしてきた。イギリスがインド（現在のバングラデシュ、パキスタンを含む）の植民地政策による行為に対して、謝罪や賠償をしたことがあるだろうか。私はそのような話を一度も聞いたことがない。

現在アジアの平和は、帝国主義の再来ともいわれる中国の脅威によって緊張状態にある。「かつて自分たちは侵略された」として日本に謝罪を要求する中国が、今度はチベット、ウイグルなどの近隣諸国を脅かす存在となり、こうした人々を弾圧下に置いている。少子高齢化が進み、人口がますます減少する日本において、五〇年後、一〇〇年後はどうなるのだろうか。

『パル判決書』は、長文であるだけでなく、その時代の歴史をしっかりと学ばなければ理解できない内容であるが、今こそ世代を問わず、一人でも多くの人々に読んで理解されるべき貴重な歴史的資料である、と筆者は思っている。



ダッカ市内のベンガル語運動（1952年）

第七章 バングラデシュ小史

イギリス植民地のもとでのベンガル分割

これまで見てきたように、ベンガルはさまざまな分野で偉大な人物を産み出し、インド独立運動にも大いに貢献してきた。しかし、インドの独立は、タゴール、ラス・ビハリ・ポース、スバス・チャンドラ・ボースらが希望していた統一インドの独立ではなく、パキスタンとインドの分離独立という結果に終わってしまった。本書の最後に、この分離独立の悲劇を最も厳しい形で受け、さらに多くの犠牲を出してパキスタンからの独立を果たした私の祖国バングラデシュについて、その歴史を簡単に紹介して本書を閉じたい。

まず、ベンガルとは、現在の西ベンガル州をはじめとするインド東部とバングラデシュを合わせた地域のことを指す。これは「はじめに」で述べたように、一九〇五年のイギリスの勝手な分割統治によって分断された。

このベンガルは、ヒマラヤ山脈からの源流がガンジス川、ブラマプトラ川、パドマ川、メグナ川などの大きな河を通じてベンガル湾に流れて形成された肥沃なデルタ地帯であり、豊かな農作物をもたらしたため、イギリス帝国に注目され、一七世紀の半ば以降から

イギリス帝国は東インド会社の拠点をスラト、ボンベイ、マドラス、カルカッタに置き、インド貿易を始めた。一八世紀に入ると、当時インドを支配していたムガル帝国の衰退に乗じて、イギリスは領土支配に乗り出した。

当時ベンガル州を治めていたベンガル太守シラジ・ウドウ・ダウラは、イギリス東インド会社とその職員が行っている密貿易がベンガル経済に大きな打撃を与えているのに抗議し、正当な関税支払いを要求したが、イギリス側は高圧的に拒否した。これに対し一七五六年、シラジはカルカッタ駐屯中のイギリス軍を攻撃し、彼らを逃走させた。これはイギリス植民地史上でも最悪の敗北ともいわれるが、イギリスは反撃に転じるとともに、シラジ軍の内部にさまざまな工作と分断を仕掛け、結局シラジの軍は切り崩されてしまう。

一七五七年、プラッシーの戦いでシラジは敗れ、捕らわれて殺された。これによりイギリス東インド会社はベンガル地方の支配権を握り、インド全域に対する植民地支配の基礎を確立した。その後、イギリスはマイソール戦争（一七六七―一七九九）によって南インドを支配下に置き、マラータ戦争（一七七五―一八一八）により中部から西部インドを制圧、シク戦争（一八四五―一八四九）によってパンジャブを征服するなど、一九世紀半ば

までにイギリスはインド全域を支配下に置く。イギリスは陰謀と武力によって全インドを植民地化することに成功した。

ブラッシーの戦い以降から始まったイギリスのインド植民地政策は、その後約二〇〇年に及ぶ年月の間に、特にベンガル州から搾取した莫大な金や財宝、そして豊かな大地からの恵みである香辛料、お茶、ジュートなどの農産物から得る利益を元に、世界初の産業革命を成し遂げ、イギリスの中央銀行に発展したイングランド銀行の資産の元を作った。逆に言えば、イギリスの繁栄はベンガルの搾取により成立したといってもよいだろう。

インドからの分離とバングラデシュ独立

一九四七年八月のインドの分離独立により、イスラム教徒の多いバングラデシュはパキスタンに組み込まれ、インドをはさんで東パキスタンと呼ばれるようになった。

しかし、文化も言語も全く違う民族が、東西に分かれて宗教の共通性だけで一つの国家を共同運営することは困難をきわめた。また当時、東パキスタンの人口の約二〇〇三〇パーセ

ントはヒンドゥー教徒であり、イスラム教徒も文化的にヒンドゥー教の影響を受けていた。

独立後のパキスタンの政治は混乱していた。独立時の指導者ジンナーは、パキスタンの政治体制を整える間もなく一九四八年に病死し、彼を継いだリヤカト・アリ・カーンも一九五一年に暗殺されてしまう。一九五八年、軍事クーデターでマハムド・アユブ・カーンが政権を握るまで混乱は続き、国民の中にも失望が広がった。

そして、東パキスタンにおいては、事態はもっと深刻だった。印パ分離独立後もまた、東パキスタンは、政治的中心地である西パキスタンの人々に搾取されるという、イギリス植民地時代と本質的に変わらない状態に置かれた。

さらに、ベンガル語を話す東パキスタンの人々に対して、パキスタン政府はウルドゥー語のみ公用語とする言語統制を行った。これに対し、ダッカ大学の学生たちは抗議活動を開始したが、パキスタン政府は、抗議集会を開催すれば反政府運動とみなして直ちに射殺すると通告。学生たちはそれでも一九五二年二月二日に集会を強行し、警官の銃弾により死者が出た。この事件が大きなきっかけとなり、言語を護ろうという運動から、後にバングラデシュ独立運動へと発展していく。

言語を護るためには死をも辞さなかった若者たちの勇気を讃え、一九九九年、ユネスコはこの日、二月二一日を「国際母語デー」に定めた。

その後も、東パキスタンは自治もほとんど認められず、西パキスタンに植民地支配されているような状態に置かれていることへの不満が募っていった。そして一九六二年に始まった、カシミール地方の帰属をめぐるインド・パキスタン戦争における敗北により、パキスタン全体に政府批判と民主化への要求が強まっていく。東パキスタン・ムスリム連盟、政治団体「アワミ連盟」を率いる指導者シェイク・ムジブル・ラーマンは、何度も逮捕されたながらも、東パキスタンの立場を訴え続けた。

一九七〇年一月、パキスタン国会総選挙を目前に、巨大なサイクロンが東パキスタンを襲った。洪水に飲み込まれた死者は二〇万人とも三〇万人ともいわれる。しかし、パキスタン政府は十分な救援対策を取らなかったため、東パキスタンのマスコミは激しく中央政府を批判した。

ムジブル・ラーマンも、これ以上東パキスタンは西パキスタンの支配を受けるべきではないという演説を行い、一二月の総選挙では、パキスタンの自治権拡大を求めるアワミ連

盟は東パキスタンの割り当て議席一六二議席中、一六〇議席を獲得した。この高い支持率を背景として、ムジブル・ラーマンは東パキスタンがより大きな自治権をもつことを要求した。これは、パキスタンが東西二州からなる連邦制国家へ移行することを含んでいた。

しかしパキスタン政府はこれを受け入れず、一九七一年三月二五日、パキスタン軍は一斉に東パキスタンに侵攻して戒厳令を敷き、知識人や反政府的な運動家を次々と虐殺、指導者ラーマンを逮捕、拘束して、西パキスタンに連行した。

翌三月二六日、独立バングラデシュ・ラジオ放送は、東パキスタン軍のジアウル・ラーマン少佐が、シェイク・ムジブル・ラーマンの声明を代読する形で、「今日バングラデシュは独立した。最後の勝利まで徹底抗戦しよう」と呼びかけ、四月一〇日にアワミ連盟は「バングラデシュ人民共和国」独立を正式に宣言し、拘束中のムジブル・ラーマンが大統領に就任した。ここから、バングラデシュ独立戦争が始まった。

卷末のベマ・ギャルボ先生との対談でも触れているが、この時インドからは、チベット義勇軍を含むさまざまな支援が寄せられ、彼らは、東パキスタン軍を脱走した兵士たち、民間義勇軍、警察などから急きよ編成されたバングラデシュ解放軍とともに戦った。「フ



シェイク・ムジブル・ラーマン

この独立戦争と独立以後のバングラデシュにおいて、日本は民間レベル、政府・国会議員・経済界レベルでも熱心な支援を行った。一九七〇年のサイクロンの時期からさまざまな救援募金活動が行われ、早川崇議員（自民党）は初期段階から熱心にバングラデシュを支援した。吹浦忠正氏は赤

が出たともいわれる。

一九七二年一月には東ドイツなど東欧諸国、そしてソ連がバングラデシュを国家として承認した。日本も西側諸国の中では最も早い二月一〇日に国家承認に踏み切った。日本の戦後外交の中でもいち早く独自の外交路線が実現したのは、このバングラデシュの承認と支援である。一九七二年七月二日には、シムラー協定によりパキスタンがバングラデシュ独立を承認し、名実ともにバングラデシュは独立を達成した。

独立時のバングラデシュは、九カ月におよぶ内戦のために疲弊し、混乱していた。この独立戦争では、パキスタン軍の虐殺や、難民の餓死、病死などによって三〇〇万人の犠牲

リーダム・ファイター」という義勇兵組織は、インド国境沿いの町に募集施設と訓練組織を持ち、また内戦の混乱から、約一〇〇〇万人の難民がインドに向かった。

インドは、この危機を回避し、バングラデシュ民衆を救うためにはいかなる手段も取る宣言、国際社会にもバングラデシュ支援を訴えるところにも、一二月の第三次インド・パキスタン戦争によってパキスタン軍を破り、約二週間でバングラデシュに駐留していたパキスタン軍を降伏させ、停戦に導いた。

一九七二年一月八日、拘束されていたムジブル・ラーマンが釈放され、一〇日に民衆の大歓迎のなか、ダッカにて「我が国は今、自由になった。私のシヨナル・バングラ（黄金のベンガル）は自由になった。私の夢は実現した」と演説し、一二日に首相に就任した。

ムジブル・ラーマンとアワミ連盟は、独立の際に自分たちを助けてくれたインドと、当時インドと親密な関係だったソ連の影響を受け、国の四原則「民族主義、社会主義、民主主義、政教分離」を打ち出した。ここで言う社会主義とは、理論的なものというよりも、外国の経済支配を受けないこと、いまだに民族資本が確立されていない中、国营の形で経済を上げなければならないという現実に即した経済政策のことだった。

十字社のバングラデシュ駐在代表として、一九七一年にバングラデシュに赴き、優れた記録『血と泥と バングラデシュ独立の悲劇』を発表、貴重な文献としてバングラデシュでも翻訳されている。

一九七三年には日本政府はバングラデシュ建国の父ラーマン首相を公賓として招待、当時の田中角栄首相との会談で、バングラデシュ経済支援のための使節団派遣が決定され、永野重雄日本商工会議所会頭を中心に、川崎重工、三菱商事、東急、旭化成、日商岩井の各社長などとともに、外務、大蔵、通産など関係各省の課長クラスが参加することになった。

一方、当時の中国はパキスタン政府を支持し、バングラデシュを承認しなかった。そのような状況下で、ここまで日本が自立した外交を行い、かつ独立したばかりの新興国を支援した例は戦後ほとんどない。そこにはさまざまな理由が考えられるが、やはり、このベングルが生んだタゴール、ラス・ビハリ・ボース、スバス・チャンドラ・ボース、そしてパル判事と日本との、深い関係を抜きに語れないだろう。しかし、このバングラデシュ独立における日本側の貢献や協力に対しては、今の段階ではあまり資料が公開されていないのが現状である。

独立後も安定しない政局

しかし、国際関係の改善にもかかわらず、バングラデシュの政局の安定や国家の発展はなかなか進まなかった。

ムジブル・ラーマンは独立運動家としては優れていたが、新国家建設は容易に成し遂げられる課題ではなかった。印パ分離独立より四半世紀もたたないうちに、二度目の独立を経験したバングラデシュには、独立国として自立できる経済力も残されていなかった。インフレ・失業・食糧不足に加え、頻繁に発生する大洪水による被害、また二度におよぶ石油ショックの影響は、深刻なバングラデシュの経済状態をさらに悪化させた。国内政治も混乱をきわめ、アワミ連盟党員の汚職事件、共産主義やパキスタンを支持するイスラム原理主義勢力の台頭もあり、ムジブルはこうした経済的、政治的問題をうまく解決することができなかった。

ムジブル・ラーマンは軍や警察を中心とした強権的な政策を敷き、戒厳令を布告して大統領に就任した。また、アワミ連盟を含む四つの政党連合であるB A K S A L（農民労働

者アワミ連盟)を結成してその党首になり、BAKSA以外のすべての政党を禁止するなどの強硬策で国内秩序を回復しようとした。しかし、事態は改善されず、むしろ独立によって勝ち取った自由民主主義が失われたことに対して、独立戦争に貢献した軍人の間でもムジブル・ラーマンへの批判が高まった。

その結果、一九七五年八月一日、ムジブル・ラーマンは、夫人と三人の息子、息子の妻二人、弟夫妻とその息子とともに、青年将校七名が率いる陸軍の一隊によるクーデターで殺害された。ムジブルの側近であった甥の邸宅でも家族が皆殺しにされたが、このとき、外国に滞在中であったムジブルの二人の娘だけが無事生きのび、その姉妹の姉が現在のバングラデシュ首相シェイク・ハシナである。こうして「建国の父」と呼ばれたムジブル・ラーマンはクーデターに倒れ、殺害の現場となったラーマン邸はそのままの状態で保存され、現在は記念館として一般に公開されている。

ムジブル・ラーマン大統領の暗殺直後に、アワミ連盟のムスタク・アーメッドが大統領に就任した。しかし、このムスタクは、ムジブル・ラーマン暗殺の首謀者の一人であるといわれ、同じ政党であるにもかかわらず、アワミ連盟の活動を禁止した。そのため、同党

の指導者たちは身の安全を確保するために地下に潜るか、亡命するかの道を選んだ。ムジブル・ラーマンの古くからの同志であり、独立運動の指導者でもあった四名もクーデターによって逮捕され、裁判を受けることなく刑務所で処刑された。

この政権は、一九七五年一月五日、軍人カレド・ムシャロフによる再度の軍事クーデターによって倒され、さらに七日には、反ムシャロフ派の軍人が再び決起、当時監禁されていたジアウル・ラーマンを解放して彼を指導者に仰いだ。この三度目のクーデターにより、政権はジアウル・ラーマン率いるBNP(バングラデシュ民族党)に移り、軍事独裁政権が始まる。

しかし、一九八一年にはジアウル・ラーマン大統領も暗殺され、当時バングラデシュ軍の参謀長であったエルシャドが実権を握った。彼は一九八三年、正当な手続きも踏まずに政権を奪取して大統領となり、九年間におよぶ軍事独裁政治体制が敷かれた。この政権下では、イスラム原理主義者が軍人と手を組んで大臣職を得るなど政教分離の原則が否定されるとともに、アワミ連盟は政党としての活動が禁止され、建国の父でありバングラデシュの初代大統領であるムジブル・ラーマンの功績を否定し、その名も抹殺しようという政策



シェイク・ハシナ (Avalon/時事通信)

次の二〇〇一年の総選挙では、BNPがイスラム原理主義の政党ジャマティ・イスラムとの連立政権を掲げて過半数の議席を獲得し、カレダ・ジアが再び首相に就任した。その政権下では二〇〇四年にダッカ爆破事件が起き、シェイク・ハシナは片耳に大ケガをし、女性アワミ連盟の党首ほかアワミ連盟の黨員など数名が死亡した。この事件は、BNPとジャマティ・イスラムによる犯行であるといわれている。

がとられた。

シェイク・ハシナ政権がもたらした政治・経済的安定

暗殺事件で生き残ったムジブル・ラーマンの長女シェイク・ハシナは、亡命先のインドでアワミ連盟の党首に選出されていたが、一九八一年にバングラデシュに帰国し、禁止されていたアワミ連盟の活動を開始した。

こうしたなか、軍事独裁政権に対する人々の不満は学生運動から次第に全国的な民主化運動に発展し、一九九〇年、エルシャド大統領は退陣に追い込まれた。これもあまり日本では注目されないが、ソ連崩壊と同時期にアジアで成功した民主化運動の一つである。

翌一九九一年三月、暫定政府が組織されて総選挙が行われ、エルシャドは彼の支持者とともにジャティオ党から候補者を出したが大敗した。この総選挙ではBNPがアワミ連盟を破り、故ジアウル・ラーマンの妻でBNP党首であるカレダ・ジアが、バングラデシュではじめての女性首相に就任した。この時の憲法改正で、大統領制から任期五年の議院内

閣制に変わり、以後は基本的に五年ごとの総選挙で二大政党BNPとアワミ連盟で政権交代が繰り返されてきた。

一九九六年の総選挙ではアワミ連盟が二年ぶりに政権を奪還し、シェイク・ハシナが念願の首相となった。首相となったシェイク・ハシナは、父の暗殺事件の裁判を禁じた法律を国会で取り消し、その後ムジブル・ラーマン暗殺事件の裁判が行われ、二〇一〇年に暗殺者たち五名に対し、死刑が執行された。

二〇〇六年には総選挙が予定されていたが、BNPとアワミ連盟は選挙日時や候補者の問題などで、互いに自己の政党に有利な条件を求めて衝突し、選挙が事実上不可能な状態となり、軍が出動し臨時政府が組織された。三年後の二〇〇九年にやっと総選挙が行われてアワミ連盟が勝利し、この時より現在に至るまで、三期連続でシェイク・ハシナが首相を務めている。

二〇一四年の総選挙では、「デジタル・ বাংলাদেশ」というスローガンのもと、アワミ連盟を筆頭としてジャティオ党、共産党ほか複数の政党を含む連立政権が成立し現在に至る。

シェイク・ハシナ政権の経済政策により順調な経済発展を続け、二〇一四年には高度成長期に入り、現在は後発開発途上国からの卒業を目前にしている。独立から今日に至るまで、 বাংলাদেশ は日本のODAやNGO・NPO法人などからの無償・有償の資金提供や、さまざまな方面での技術協力を通じて、現在も多大なる支援を受け続けている。また、日本企業からの投資も含めて、日本の বাংলাদেশ に対する貢献に対して、一人の বাংলাদেশ 国民として深く感謝していることを皆様にお伝えして、本書の結びとしたい。



特別対談

ペマ・ギャルポ×シヤーカー